

〔博士論文要約〕

日本の小学校で日本語指導を受ける
ニューカマーの児童のニーズと支援に関する研究

令和元年度

山 田 （坂 口） 有 芸

本研究の目的は、日本の小学校において日本語指導を受けるニューカマーの児童（以下、ニューカマーの児童）に焦点を当てて、彼／彼女らのニーズとその表明化の様相について解明することである。本研究には、そのことを通じて、ニューカマーの児童に対する支援の一形態としての日本語指導を担う指導者（以下、日本語指導者）（日本語指導担当教員（以下、担当教員）ならびにボランティア）の役割について議論する際の知見を得るといふねらいがある。

以上の目的を達成するために、本研究では、まず、日本の学校教育では、義務教育段階の学校における多様な言語的・文化的背景を持つニューカマーの児童生徒の増加に対する主な施策として、日本語指導体制の整備が進められてきたという社会的背景について整理した（序章）。その上で、文献研究により、日本の学校におけるニューカマーの児童生徒を巡る議論について整理した（序章）。さらに、ニューカマーの児童生徒と日本の学校文化に関する先行研究の検討（第1章）、ならびに、支援におけるニーズに関する理論の先行研究の検討（第2章）を行った。その上で、ニューカマーの児童生徒と日本語指導者および日本語教室に関する先行研究の検討（第3章）を行った。

より具体的には、第1章では、日本の学校文化に関する先行研究の検討を行い、児童生徒の同質性が強調され、画一的な対応が行われるといった、日本の学校文化の特徴について整理した（例えば、児島, 2006）。また、そのような日本の学校文化のもとでは、例えば、ニューカマーの児童生徒が、自尊心や学習に取り組むことへの意欲を失い、不登校となることなどが指摘されている（児島, 2006）ことを踏まえつつ、彼／彼女らの指導・支援に関する課題について整理した。

第2章では、日本の学校におけるニューカマーの児童の困難について、支援という観点から議論を展開する際に、彼／彼女らの個別のニーズを汲み取る必要があるという指摘（二井・緩利, 2013）を踏まえ、彼／彼女らが経験する困難を、ニーズに関する理論の観点から捉え、学校においてどのような支援が求められているのかについて明らかにする必要性を提示した。その上で、第2章では、主に社会福祉学や社会学といった学問分野において取り上げられてきた支援に関わる議論をもとにして、本研究の理論的枠組みであるニーズに関する理論の検討を行った。そこでは、先行研究（例えば、上野, 2011）において、ニーズは、それを認識（把握）する者によって異なる認識（把握）がなされるために、本人（支援の受け手）と第三者（支援者／支援の与え手）の認識に加えて、両者の相互作用という観点から捉える必要があるという指摘がなされていることを提示しつつ、本研究の理論的な枠組みを示した。

第3章では、日本語指導を、ニューカマーの児童生徒に対する支援の一形態として捉えた上で、ニューカマーの児童生徒と日本語指導者および日本語教室に関する先行研究の整理を行った。そこでは先行研究（例えば、児島, 2006）の議論を踏まえて、主に、学校における日本語指導者の実践が、学校教員が自らのニューカマーの児童生徒に対する対応を見

直す機会を提供しているという点、すなわち、日本語指導者が日本の学校文化の変容を促しうる存在であるといった点を提示した。

第4章では、第3章までに示した先行研究の課題（限界）について提示した。具体的には、ニューカマーの児童生徒が経験する困難と日本語指導者の実践に関する先行研究では、その研究の対象者として、ニューカマーの児童生徒（と彼／彼女らが経験する困難）あるいは日本語指導者（と彼／彼女らの実践）のどちらか一方に焦点が当てられる傾向にあったことを指摘した。その上で、ニューカマーの児童生徒のニーズと日本語指導者による支援との関係性（相互作用）が、管見の限りほとんど議論されてこなかったといった点を、先行研究の課題（限界）として提示した。また、ニューカマーの児童生徒のニーズについても、ニーズが本人と日本語指導者によってどのように認識（把握）されているのかが十分に明らかにされてこなかったという点、さらには、両者の相互作用の観点からニーズを捉え、そこでの日本語指導者の役割についても十分には明らかにされてこなかったという点を先行研究における課題（限界）として提示した。

加えて、第4章では、以上のような先行研究における課題（限界）を踏まえ、本研究では、ニーズに関する理論を用いて、日本の学校におけるニューカマーの児童と日本語指導者との相互作用に焦点をあてて、ニューカマーの児童生徒のニーズとその表明化の様相について解明するという目的を提示した。また、その際、両者の相互作用に対して日本の学校文化が及ぼしている影響や、日本語指導者の立場（担当教員ならびにボランティア）の違いによる役割の違いに考慮した分析・考察を行うことを提示した。その上で、研究目的を達成するために、次の5つの研究課題を設定した。

- 【研究課題1】日本の学校で日本語指導を受けるニューカマーの子どもの小学校在学時に自覚したニーズおよび日本語指導の受講経験に対する認識について解明する。
- 【研究課題2】ニューカマーの児童が自らのニーズに基づいて日本語指導と日本語指導者に対して抱いている認識について解明する。
- 【研究課題3】担当教員（日本語指導者）が認識（把握）するニューカマーの児童のニーズを明確にするとともに、担当教員がニューカマーの児童の学級担任（以下、担任）（学級での指導）との関係性の中で果たしている役割を探索する。
- 【研究課題4】ニューカマーの児童のニーズをめぐる学級内での本人、ボランティア、担任ならびに他の児童間の相互作用の様相を解明するとともに、ボランティアが果たしている役割について探索する。
- 【研究課題5】以上の【研究課題1】から【研究課題4】の分析結果と考察をふまえて、総合的考察を行う。

【研究課題1】（第5章）では、日本語指導を受けるニューカマーの子どもが小学校在籍

時に自覚したニーズや日本語指導の受講経験に対して抱いていた認識について明らかにすることを目的とした。本目的を達成するために、第5章では、日本国内の中学校に在籍するニューカマーの生徒で、小学校在籍時に日本語指導を受けていた者24名を対象として実施した質問紙調査の結果の分析と考察を行った。分析結果を踏まえて、【研究課題1】については、主に、ニューカマーの子どもが、日本語に関わる支援を学校内の様々な関係者に対して求めていることや、日本語指導の受講経験に対して総じて肯定的な認識を抱いていた傾向があること等を指摘した。

【研究課題2】(第6章)では、ニューカマーの児童が自らのニーズを自覚した上で、日本語指導と日本語指導者に対してどのような認識を抱いているのかについて明らかにすることを目的とした。本目的を達成するために、第6章では、日本語指導を受けているニューカマーの児童20名を対象として実施したインタビュー調査の結果の分析と考察を行った。その結果を踏まえて、【研究課題2】については、主に、ニューカマーの児童は、学級ではニーズの表明化を控える側面がある一方で、日本語指導者に対して(日本語教室において)は、理解することが困難であるというニーズを表明する側面があること等を指摘した。

【研究課題3】(第7章)では、担当教員(日本語指導)が認識(把握)するニューカマーの児童のニーズや、担当教員がニューカマーの児童の学級での指導を担う学級担任(以下、担任)との関係性の中でどのような役割を果たしているのかについて探索することを目的とした。本目的を達成するために、第7章では、日本語教室が設置されている小学校における参与観察と、担当教員1名ならびにニューカマーの児童の担任4名を対象として実施したインタビュー調査の結果の分析と考察を行った。その結果を踏まえて、【研究課題3】については、主に、担当教員が、ニューカマーの児童との個別の関わりを通して、言語(日本語)面や学習面の他にも、生活面等に関わるニーズがあることを認識(把握)し、それを踏まえた支援を実施(計画)している側面があることを指摘した。他方で、担当教員(日本語指導)と担任(学級での指導)との関係性においては、担任による学級での指導が基軸とされ、そのような指導が日本語指導よりも優先される側面があることを提示しつつ、年度の終わり頃には、担任のニューカマーの児童のニーズ等に関する認識や、担任と担当教員の関係性に変化の兆しが現れていたことを指摘した。

【研究課題4】(第8章)では、学級内でのニューカマーの児童のニーズをめぐり、本人、ボランティア、担任ならびに他の児童間の相互作用の様相を解明することを目的とした。本目的を達成するために、第8章では、筆者がボランティアとして入り込んだ、日本語指導を受けるニューカマーの児童の学級における参与観察と、ニューカマーの児童の担任を対象として実施したインタビュー調査の結果の分析と考察を行った。その結果を踏まえて、【研究課題4】については、主に、学級内では、児童全体によって学校文化の構成要素の一つである学級規範に沿った行動をとることが志向されており、そのもとで、ニューカマーの児童の学級規範を意識した外面的模倣や、ボランティアによるニューカマーの児童に対する支援の制限などが見られたことを指摘した。一方で、学級

内では、担任と他の児童によって、ニューカマーの児童のニーズへの応答につながりうる個別対応も同時に行われており、それらがボランティアの存在によって促進されている側面があることなどを提示した。加えて、ニューカマーの児童とボランティアとの相互作用においては、ニューカマーの児童が、自らの様々なニーズをボランティアに対して表明し、支援を要請する行動をとる一方で、学級規範（学校文化）が関わる場面においては、ボランティアの支援の中断を要請する行動をとるという、ニューカマーの児童の異なる（相反する）行動が観察されたことを提示した。

以上の【研究課題1】から【研究課題4】までの結果を踏まえて、本研究では、【研究課題5】（終章）として総合的考察を行った。具体的には、終章では、ニーズに関する理論を議論する際には、日本の学校（学級）においては、ニューカマーの児童が、学校文化（学級規範）を意識して、自らのニーズの表明化を抑制する場合があることから、本人と第三者（支援者）のニーズに関する認識を問うことに加えて、第三者（支援者）の立場、ならびに本人と第三者が置かれている社会（文化）的環境の特徴も考慮に入れる必要があることを指摘した。また、終章では、実践的示唆として、日本語指導者（担当教員ならびにボランティア）に共通する役割という観点から、日本語指導者が日本語教室という学級とは異なる場所において、ニューカマーの児童が学級では行うことが困難なニーズの表明化を促すことが可能であることを提示した。その上で、担当教員の役割の特徴として、複数のニューカマーの児童に共通して見られるニーズと、個別のニューカマーの児童に見られる固有のニーズの両方を把握しうる立場にあるという特徴や、他の教員（担任）がニューカマーの児童のニーズ等について理解を深める機会を提供しうる立場にあるという特徴を提示した。一方で、ボランティアに特徴的な役割としては、学校教育に社会福祉的な視点を取り入れてニューカマーの児童の支援全般を担うことで、学校（学級）内で多種多様なニューカマーの児童のニーズの表明化を促すとともに、担任や他の児童のニューカマーの児童のニーズを踏まえた個別対応を活発化しうる立場にあることを提示した。

【参考文献】

- 児島明 (2006). ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィ— 勁草書房
- 二井紀美子・緩利誠 (2013). 外国人児童生徒支援に資するアセスメントの枠組の提案 生涯学習・キャリア教育研究, 9, 1-12.
- 上野千鶴子 (2011). ケアの社会学—当事者主権の福祉社会へ 太田出版